

「感謝経済」をめぐる“風景”3

～ ゲマインシャフトとゲゼルシャフトを止揚（アウフヘーベン）する視座の必要は ～
人間の持つ合理性と共同体的“助け合い”の融合は可能か

経済学の視点では、主に人間の経済行動の合理性（お金などにまつわる人間の行動や、モノの値段の高い安い、モノやサービスを購入することで得られる満足（効用）との関係など）について研究、追求することが中心であることが多く（これまでの近代以降の経済学では、であるが）、社会のあり様を俯瞰的に分析するスコープは決して主流ではない。

社会のあり様を俯瞰的に分析、定義するのは社会学的アプローチということになるが、20世紀以降の大量生産大量消費の、ややもすれば画一的だった経済の状況分析とは異なり、情報や人間の気持ちも複雑に絡み合った情報が大量に飛び交い人間の経済行動社会行動にも影響する21世紀には、従来の経済学では分析できない状況が生じていることは間違いない。こうしたことに思いを致す時、同時に、過去の“知の巨人”たちの視座を改めて思い出すことも必要では、と感じることが最近多い。

このコラムではかつて、経済学の祖と言われるアダム・スミスが約250年前に、“感情道徳論”で、“感謝”と社会の関係などを論じていたことを書いたが、今回は100年ほど前にドイツの社会学者、フェルディナント・テンニース（ドイツの社会学者、1855年生-1936年没、ナチズムを公然と批判し当時のドイツで学者としての社会的地位を失ったことでも有名）が提唱した「ゲゼルシャフト」と「ゲマインシャフト」（いずれもドイツ語）の概念を取り上げる。

「ゲゼルシャフト」は「利益社会」と訳されることが多いが、合理性を追求し、利益、実用を目指す人間集団や組織で、そこでの人間は契約的な関係をベースに、ある意味利害、打算の意思持ち、観念的機械的にそれらをベースに人が集まるもの、ということである。都会的、産業社会的集団という風にも受け取ることができ、みんなが働いて利益を目指し、その利益を社員や構成員が労働の対価として賃金を受け取る企業などがその例とされる。

一方、「ゲマインシャフト」は「共同社会」と訳されることが多く、人間の本質的な意思や気持ちをベースとして、地縁、血縁、地域社会、村落、などの枠組みが社会の中心になること、を指すことが多い。英語の「コミュニティ」は「共同体」と訳すことが多いが、「ゲマインシャフト」はやや「コミュニティ」に近いと見することもできる。テンニースは血縁に基づく家族、地縁に基づく村落、友情に基づく都市などを「ゲマインシャフト」の例としている。利害、打算、損得や

その規定を詳細に記した契約等よりも、親密な相互の了解もとの人間関係、社会関係が成り立っているもの、ということになる。

テンニースは、社会の歴史的発展の進化の流れとして、社会が古代から近代に向け、「ゲマインシャフト」から「ゲゼルシャフト」に移行していった、と分析、提唱した。

言ってみれば、既に現代社会は「ゲゼルシャフト」だけで構成されているということになるかもしれない。貨幣経済とともに契約と合理性と損得をベースに、会社、企業など社会の集団が社会全体を動かすシステムが確固たる状況に入っていることは間違いないが、一方で、人間が「感情の動物」である点から見て、「ゲゼルシャフト」の中に通奏低音のように、あるいは不易流行のように古代から流れる「ゲマインシャフト」的な要素はずうっと変わらない面もあると思うのである。

夏目漱石が小説「草枕」の冒頭で記した「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される」という有名な文章。言い換えれば、合理性だけを追求して人や社会と付き合うと衝突が起こるが、感情に重きを置きすぎて人に気を遣いすぎても足をすくわれたり、合理的でない方向に向かう恐れもある、ということだろうが、人間社会は「合理性」か「気持ち」か、の部分は、おそらく古今東西、その両方の要素をどう折り合えばうまくいくのかを模索してきているのではないだろうか。「ゲゼルシャフト」的な社会や集団のあり様を追求した場合、すべては、利害、打算、損得に収れんされていく。一方で「ゲマインシャフト」的なままでは、既にシステムとして確固たる状況に至っている自由主義/自由競争の資本主義の現代ではそぐわない面が出てくることに異論はない。

現代社会は、経済生活は自己責任であり、他人がどうなろうと知らんぷり、というだけの社会であろうか？世界各地も合理性や資本主義だけの行動原理だけで成り立っているのであろうか？特に日本社会は共同体（コミュニティ）の観点では、固有の伝統の考え方が色濃く、それが、日本が世界に冠たる「思いやり」「おもてなし」「気遣い」の社会であり、日本のこの“文化”は今や広く世界の経営学でも注目され、研究もなされているところである。（日本の最初から民営を貫いている、ある航空会社はアメリカ・ハーバード大学でその経営の歴史などが教材にもなっている）

21世紀、特にリーマンショック以降は、行き過ぎた資本主義、金融資本主義の在り方に対して「これでいいのだろうか」「このままでいいのだろうか」の疑問が様々な分野で投げかけられ、社会と経済の在り方を振り返る機運が常にある状況に入ったと考える。合理性だけを追求しても社会はうまくいかない、気持ちだけに頼ってもうまくいかない中、漱石の至言と合わせ、「ゲゼルシャフト」と「ゲマインシャフト」のアウフヘーベン（止揚＝ドイツの哲学者、ヘーゲルが弁

証法の中で提唱した概念、対立や矛盾する要素を発展的に統一していき、新しく高い段階につなげていくこと) を考える必要が常に求められていると思うのである。

資本主義と、“感謝”をベースとした“助け合い”的な考え方とをつないでいく要素も併せ持ち、経済や社会の在り方の新機軸を目指す“感謝経済”の考え方は、「ゲゼルシャフト」と「ゲマインシャフト」の止揚を目指す中で、何らかの役割を果たすための模索の1風景と捉えることができると感じている。

【株式会社オウケイウェイヴ ミッション (企業理念/目的)】

互い助け合いの場の創造を通して、物心両面の幸福を実現し、世界の発展に寄与する



株式会社オウケイウェイヴは2018年4月、より多くの人々が活躍できる社会を目指した新たな経済圏『感謝経済』の考え方と、その実際的な経済活動具現化のためのプラットフォームを開発した。

この試み、新たな概念の事業が注目されている中、できるだけ中立的に、「感謝」と「経済」、「互い助け合い」と「経済」の在り方、新たな社会と経済の在り方などを、月1回のペースで、「感謝経済」をめぐる“風景”と題して、コラムを連載し、所感や考察などを示していく。



大山 泰 OKWAVE 総合研究所所長

1961年東京生まれ。一橋大学経済学部卒。株式会社フジテレビジョンで経済部長、経済担当解説委員、等を歴任。BSフジ「プライムニュース」など報道番組で経済解説を行う。内閣府/公正取引委員会「競争政策と公的再生支援の在り方に関する研究会」、農水省「政策評価第三者委員会」など、複数の政府の有識者会議等の委員を歴任。